週報
こひつじ
第40巻　8号
大津キリスト教会
菊池郡大津町室 119
TEL 096-293-4470
FAX 096-293-4961
牧師　米村　英二

信じる者になりなさい

信じない者にならないで、信じる者になりなさい。
（ヨハネ 二〇の二七）

その一　悲観主義者トマス

十字架の死の後、イエスは復活される。そしてある日、その姿を弟子たちに現わされると、弟子たちはイエスが生きておられることを知って希望に溢れたのだった。

ところがトマスだけは、その日、その場にいなかった。

数日後、彼はそのことを弟子たちから聞くのだが、彼の反応はひややかだった。そして言った。

「私は、自分でイエスの手の釘の跡にふれ、自分の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じない」

その八日後、イエスは再びご自分を弟子たちに現わされ、そこにいたトマスに言われた。

「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい」

イエスにそう言われて、トマスは自分の不信仰を恥じ入ったことだろう。が、イエスは彼を責めず、やさしく、こう言われたのである。

「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」

なんと慰めに満ちた言葉ではないか。

だが、なぜトマスはイエスの復活をすぐに信じることができなかったのか。

彼が悲観的な人間であったからだと、多くの注解者は述べている。

では、悲観的であるのは悪いことか。

そうとばかりは言えない。

なぜなら、悲観的な人には、どちらかというと物事を深く考える人が多いからだ。そして人はみな、人生をつきつめて考えるなら、悲観的にならざるをえないのではないか。

人は生まれ、みな死ぬ。例外なく死ぬ。多くの楽しいこともあるだろう。しかし、どんな人の人生にも必ず終わりがくるのである。

聖書は言う。

「母の胎から出て来たときのように、また裸でもとの所に帰る」（伝道者五の一五）

また言う。

「私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年」（詩篇九〇の一〇）

そんな短い人生にどんな意味があるのか。

『天路歴程』の著者ジョン・バンヤンも悲観的な人だった。彼は言った。

「生きる意味について考えることも、悩むこともない犬や猫がうらやましい」と。

トマスは沈思黙考する人だった。それだけに、どうしても悲観的にしか人生を見ることできなかったのだろう。

トマス同様、われわれも信じるより疑うことが、明るい未来より暗い未来を予想することが多いのではないか。

父がそうだった。

小学六年のとき、私は重い病気にかかり、一年以上も学校へ行けなかった。食欲がなく、どんどんやせてゆく。いろんな医者にかかったが、なかなか快方に向かわない。あるとき父が床にふせっている私の顔をじっと見て、苦しそうにつぶやいた。

「この子はもうだめだろう」

しかし、私は父を責められなかった。病院代で家の家計を苦しめていることを知っていたからだ。

それにくらべ母は、なぜか明る

かった。私の前で暗い顔をすることはなかった。そんな母を見ていると、治りそうな気がした。私は母の明るさに救われたのだと思う。

クリスチャンになってまもなく、私は伝道のために自分をささげたいと思うようになった。そんな私の願いが、再び父を苦しめるようになった。

キリスト教が息子を奪うと思い込んだのだ。

父は感情的になり、怒りにまかせ、私を畳にたたきつけた。父の苦しさがわかっていたし、申しわけない気持ちもあったので、抵抗はしなかった。

しかしやがて私は熊本に戻ってきた。そして私のその後の人生を父はつぶさに見た。そしてわかった。

自分は息子を失ってはいなかったのだと。すると、あるとき父は私に手をついて謝った。

「私が悪かった。今、何かの宗教を持てと言われるなら、私は迷わずおまえの宗教を選ぶだろう。キリスト教はほんものの宗教だ。おまえの生活を見て、それがよくわかる。私が死んだらキリスト教式で葬ってくれ」

そう言い残して死んでいった。

父もまた、私が会社をやめ、伝道の道に進むからといって、悲観的になる必要はなかったのだ。

「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」

これが、だれに対しても、イエスが言われる言葉なのではないだろうか。（続）

今日の礼拝

○第一礼拝は午前一〇時から、第二礼拝は午前一一時から。

○教会学校は午前一〇時から。

○説教は長岡舞子さん。

先週の礼拝

司会は岩崎宏志さん、奏楽は屋宜浩子さんでした。

説教は、第一サムエル記一〇章から。一農民にすぎなかった青年サウルが、どのようにしてイスラエル初代の王となったかについて語りました。若いときは立派でした。しかしやがて、彼の人生は傾き始めるのです。それはなぜかと問いました。

先週の出席

○第一礼拝が四六名、第二が四八名、合計九四名（男三一、女六三）。それに子どもが一〇名、合わせて一〇四名でした。

○福島県南相馬市に単身赴任中の屋宜和成さん、兵庫県の高校で教師をしている江藤宏美さんが、それぞれ帰省し、礼拝に出席してくださいました。